

和太郎さんと牛

新美南吉

青空文庫

一

牛ひきの和太郎さんは、たいへんよい牛をもっていると、みんながいつていました。だが、それはよぼよぼの年とつた牛で、おしりの肉がこけて落ちて、あばら骨も数えられるほどでした。そして、から車をひいてさえ、じきに舌を出して、苦しそうにいきをするのでした。

「こんな牛の、どこがいいものか、和太はばかだ。こんなにならないまえに、売ってしまつて、もつと若い、元気のいいのを買えばよかったんだ」

と、次郎左工門^{じろうざもん}さんはいうのでした。次郎左工門^{もん}さんは若いころ、東京にいて、新聞の配達夫^{げなん}をしたり、外国人の宣教師の家で下男^{げなん}をしたりして、さまざま苦労したすえ、りくつがすきで仕事^{しごと}がきらいになつて村にもどつたという人でありました。

しかし、次郎左工門^{もん}さんがそういつても、和太郎さんのよぼよぼ牛は、和太郎さんにとつてはたいそうよい牛でありました。

どういふわけなのでしょう。

人間にはだれしもくせがあります。和太郎さんにもひとつ悪いくせがあつて、和太郎さんはそれをいわれると、いつもおそれいって頭をかき、ついでに背中の^{せなか}のかゆいところまでかくのですが、それというのはお酒を飲むことでありました。

村から町へいくとちゅう、道ばたに大きい松が一本あり、そのかげに^{ちゃみせ}茶店が一軒ありました。ちやうどうまいぐあいには、松の木が一本と茶店が一軒ならんであるということが、和太郎さんにはよくなかつたのです。というのは、松の木というものは牛をつないでおくによいもので、茶店というものはお酒の好きな人が、ちよつと一服するによいものだからです。

そこで和太郎さんは、そこを通りかかると、つい、牛を松につないで、ふらふらと茶店にはいつて、ちよつと一服してしまうのでした。

ちよつと一服のつもりで、和太郎さんは茶店にはいるのです。けれど酒を飲んでいううちに、人間の考えはよくかわってしまうものです。もうちよつと、もうちよつと、と思つて、一時間くらいじきすごしてしまいます。するとちやうど日ぐれになりますから、「ま、こうなりや月が出るまで待つていよう。暗い道を帰るよりましだから」と、またすわりなおしてしまいます。

ほんとうに、そのうち月が出ます。野原は菜の花のさいているじぶん^なにしろ、稲の苗のうわったじぶん^なにしろ、月が出れば、明るくて美しいものです。しかし月が出ても出なくても、もう和太郎さんには、どうでもいいことです。というのは和太郎さんは、そのころまでにひどくよっぱらってしまったので、目などはつきりあけてはいられないからです。

それがしようこに、和太郎さんは、牛と松の木の、区別がつかないのです。ですから、松の木にまきつけた綱^{つな}をさがすつもりで、牛の腹をいつまでもなでまわしたりします。しかたがないので、茶屋のおよしばあさんが、手綱^{たづな}をとりてやります。そのうえおよしばあさんは、小田原^{おだわら}ちようちに火をともして、牛車の台のうしろにつるしてやります。なにしろ酒飲みは、平気でひとに世話をさせるものです。

和太郎さんは、およしばあさんに世話をさせるばかりではありません。これから牛のお世話になるのです。二、三町も歩くと、和太郎さんは「夜道はこうも遠いものか」と考えはじめなのです。そして手綱を牛の角^{つの}にひっかけておいて、じぶんは車の上にはいあがります。

こうすれば、もう夜道がどんなに遠くても、和太郎さんにはかまわないわけです。ただ、ねむっているあいだに、車からころげ落ちないように、荷をしばりつける綱を輪にして、

じぶんのあごにひっかけておくことを忘れてはいけないのです。

目がさめると、和太郎さんは、じぶんの家の庭にきています。牛がちゃんと道を知っていて、家へもどってきてくれるのです。

こんなことはたびたびありました。いつペンも、牛は道をまちがえて、和太郎さんを海の方へつれていったり、知らない村の方へひいていったことはなかったのです。

だから和太郎さんにとって、この牛はこんなよぼよぼのみすぼらしい牛ではありませんが、たいへん役にたつよい牛でありました。もし、次郎^{じろう}左工門^{もん}さんのすすめにしたがつて、この牛を売って若い元気な牛とかえたとしたら、こんど和太郎さんがよつぱらうとき、どこで目がさめるかわかったものではありません。十里さきの名古屋^{なごや}の街^{まち}のまん中で、よいからさめるかもしれません。それともこの半島のはしの、海にのぞんだ崖^{がけ}つぶちの上で目がさめ、びつくりするようなことになるかもしれません。なにしろ若い牛は元気がいいので、ひと晩のうちに十里くらいは歩くでしょうから。

「和太郎さんはいい牛を持っている」とみんなはいつていました。「まるで、気がよくきいて親切^{しんせつ}なおかみさんのような」といつていました。

ところで、和太郎さんのおかみさんのことです。

和太郎さんは、おかみさんについて悲しい思い出がありました。

和太郎さんも、若かったとき、ひとなみにお嫁さんよめをもらいました。

いままで、年とつた目つかちのおかあさんとふたりきりの、さびしい生活をしていましたので、若いお嫁さんがくると、和太郎さんの家は、毎日がお祭のように、明るくたのしくなりました。

美しくて、まめまめしく働くお嫁さんなので、和太郎さんも目つかちのおかあさんも、喜んでいました。

けれど、和太郎さんは、ある日、おかしなことに目をつけました。それは、ご飯を家じゆう三人でたべるとき、お嫁さんがいつも、顔を横にむけて壁かべの方を見ていることでありました。

和太郎さんは、十日間それをだまって見ていました。お嫁さんはあいかわらず、壁の方に顔をむけてご飯をたべるのでありました。

とうとう和太郎さんは、がまんができなくなつて、ききました。

「おまえは、首をそういうふうに、ねじむけておかないと、ご飯がのどを通つていかないのかや。それとも、うちの壁に、なにかかわつたことでもあるのかや」

するとお嫁さんは、なにもこたえないで、箸^{はし}を持った手をひぎの上においたまま、うつむいてしまいました。

あとでふたりきりになったとき、お嫁さんは小さな声で和太郎さんにつげました。

「わたしは、おかあさんのつぶれたほうの目を見ると、気持ちがわるくなるのです。つぶれて、赤い肉が見えているでしょう。あれを見てはご飯がのどを通らないので、横をむいているのです」

「そうか、だがおかあさんは、遊んでいて目をつぶしたのじゃないぞや。田の草をとつていて、稲の葉先でついたのがもとで、あの目をつぶしたのだぞや」

と、和太郎さんはいいました。

「わたしは、どういうもんか、あのつぶれた目の赤い肉の色を見ると、気持ちがわるくなるのです」

と、お嫁さんはまたいうのでした。

「だが、おかあさんは、稲でついて目をつぶしたのだぞや。そんなにして、わしをそだててくれたのだぞや」

「でも、わたしは、あのつぶれた目を見ていては、ご飯がのどを通りません」

和太郎さんはおかあさんとふたりきりになったとき、おかあさんに話しました。

「おチヨは、おかあさんのつぶれたほうの目を見ていると、気持ちがわるくて、ご飯がのどを通らんそうです」

それを聞くと、年とったおかあさんは、豆をたたくのをやめて、しばらく悲しげな顔をしていました。そしていいました。

「そりや、もつともじや。こんなかたわを見ていちや、若いものには気持ちがよくあるまい。わしはまえから、嫁ごがきたら、おまえたちのじやまにならぬように、どこかへ奉公に出ようと思つていたのだよ。それじや、あしたからますはん半さんのところへ奉公にいらあそこじや飯たきばあさんがほしいそうだから」

つぎの日、年とったおかあさんは、すこしの荷物をふろしき包みにして、日ざかりにこもりがさをさして家を出ていきました。門かどさき先のもえるようにさきさかっているつつじのあいだを通つて、いつてしまいました。

畑の垣根^{かきね}をなおしながら、和太郎さんは、おかあさんを見送っていました。おかあさんが見えなくなると、つつじの赤が、和太郎さんの目にしみました。

和太郎さんはなけてきました。こんな年とつたおかあさんを、今また奉公させに、よその家にやってよいものでしょうか。せつせと働いて、苦勞をしつづけて、ひとり息子^{むすこ}の和太郎さんをそだててくれたおかあさんを。

和太郎さんは縄^{なわ}きれを持ったまま、とんでいって、おかあさんの手をつかむと、だまつてぐんぐん家へひっぱつてきました。

「おい、おい、おチヨ」

と、和太郎さんはよびました。

お嫁さんは台所から、手をふきながら、出てきました。

「おまえは、近いうちにさとへいっぺん帰りたい用があるといっていたな」

「はい」

「それじゃ、きょう、いまからいきなさい」

お嫁さんは、じぶんの生まれた家に久しぶりに帰ることができるので、うれしくてたまりませんでした。さつそくよい着物にかえました。

「さとはは、たけのこがなかったな。たけのこを持っていきなさい。ふきもたくさん持っていくなさい」

と、和太郎さんはいいました。

お嫁さんはたくさんのおみやげをかかえこんで、戸口を出ていいました。

「それじゃ、いつてまいります」

「ああいけや」と和太郎さんはいいました。

「そうして、もう、ここへこなくてもよいぞや」

お嫁さんはびっくりしました。しかしいくらお嫁さんがびっくりしたところで、和太郎さんの心は、もうかわりませんでした。

こうして、和太郎さんはお嫁さんとわかれてしまいました。

そののち、あちこちから、お嫁さんの話がありました。和太郎さんはもうもらいませんでした。ときどき、もういつペンもらつてみようか、と思うこともありましたが、壁を見ると、「やつぱり、よそう」と、考えがかわるのでした。

しかし、お嫁さんをもらわない和太郎さんは、ひとつ残念なざんねんことがありました。それは子どもがないということです。

おかあさんは年をとって、だんだん小さくなっていきます。和太郎さんも、今は男ざかりですが、やがておじいさんになってしまうのです。牛もそのうちには、もつとしりがやせ、あばら骨がろくぼくのようにあらわれ、ついには死ぬのです。そうすると、和太郎さんの家はほろびてしまいます。

お嫁さんはいらないが、子どもがほしい、とよく和太郎さんは考えるのでありました。

三

人間はほかの人間からお世話になるとお礼をします。けれど、牛や馬からお世話になったときには、あまりいたしません。お礼をしなくても、牛や馬は、べつだん文句をいわないからであります。だが、これは不公平な、いけないやり方である、と和太郎さんは思っていました。なにか、よぼよぼの牛のたいそう喜ぶようなことをして、日ごろお世話になっているお礼にしたいものだ、と考えていました。

すると、そういうよいおりがやってきました。

百ひやくしやう姓せいばかりの村には、ほんとうに平和な、金色こんじきの夕ぐれをめぐまれることがあり

ますが、それは、そんな春の夕ぐれでありました。出そろって、山羊小屋の窓をかくしている大麦の穂の上に、やわらかに夕日の光が流れておりました。

和太郎さんは、よぼよぼ牛に車をひかせて、町へいくとちゆうでした。

和太郎さんは、いつもきげんがいいのですが、きようはまたいちだんとはれやかな顔をしていました。酒^{さか}だるをつんでいたからであります。

酒だるを、となり村の酒屋から、町の酢^す屋まで、とどけるようにたのまれたのです。その中には、お酒のおりがつまっていました。おりというのは、お酒をつくるとき、たるのそこにたまる、乳色のにごったものであります。

酒だるはゆれるたびに、どぼオン、どぼオン、と重たい音をたてました。そしてしずかな百姓の村の日ぐれに、お酒のにおいをふりまいていきました。

和太郎さんは、はれやかな顔をしながら、いつもこういう荷物をたのまれたものだ、音を聞いているだけでしゃばの苦しみを忘れる、などと考えていました。するととつぜん、ぼんと音がしました。

見ると、ひとつのたるのかがみ板が、とんでしまい、ちようど車が坂にかかって、かたむいていたので、白いおりが滝^{たき}のように流れ出していました。

「こりや、こりや」

と和太郎さんはいいましたが、もうどうしようもありませんでした。おりは地面にこぼれ、くぼんだところにたまつて、いつそうぶんぶんといにおいをさせました。

においをかいで、酒ずきの百姓や、年よりがあつまつてきました。村のはずれに住んでいる、おトキばあさんまでやってきたところを見ると、おりのにおいは、五町も流れていったにちがいありません。

みんながあつまつてきたとき、和太郎さんは車のまわりをうろうろしていました。

「こりや、おれの罪じゃない。おりというやつは、ゆすられるとふえるもんだ。牛車ぎゆうしゃ

でのごとごとゆすられてくるうちに、ふえたんだ。それに、このぬくとい陽気だから、よけいふえたんだ」

と和太郎さんは、旦那だんなにするいいわけを、村の人びとにむかっていいました。

「そうだ、そうだ」

と人びとはあいづちをうちながら、道にたまつた、たくさんのおりをながめて、のどをならしました。

「さて、こりや、どうしたものぞい。ほつときや土がすってしまいが」

と、年とつた百姓がわらすべをおりにひたしては、しゃぶりながらいいました。

ほんとに、ほっとけば土がすつてしまふ、とみんなが思いました。そのとき和太郎さんがいいことを思いついたのでした。

和太郎さんは、牛をくびきからはなしました。そして、こぼれたおりのところにつれていきました。

「そら、なめろ」

牛は、おりの上に首をさげて、しばらくじっとしていました。それは、においをかいで、これはうまいものかまずいものか、と判断しているように見えました。

見ている百姓たちも、いきをころして、牛は酒を飲むか飲まぬか、と考えていました。

牛は舌を出して、ペロりとひとなめやりました。そしてまたちよつと動かずにいました。口の中でその味をよくしらべているにちがいありません。

見ている百姓たちは、あまりいきをころしていたので、胸が苦しくなったほどでありました。

牛はまた、ペロリとなめました。そしてあとは、ペロリペロリとなめ、おまけに、ふうという鼻いきまで加わったので、たいそういそがしくなりました。

「牛というもなア、酒の好きなけものとみえるなア」

と村びとのひとりが、ためいきまじりにいいました。

ほかのものは、じぶんが牛でないことをたいそうざんねんに思いました。

和太郎さんは、牛がおいしそうにおりをなめるのを喜んで見ていました。

「おオよ。たべろたべろ。いつもおまえの世話になっておるで、お礼をせにやならんと思つておつたのだ。だが、おまえが酒ずきとは知らなかったのだ」

牛はてまえのおりがなくなると、ひと足進んで、むこうのおりをなめました。

「牛てもな、おおざけ大酒くらいだなア」

と村びとのひとりが、ほしいもののもらえなかった子どものように、なげやりにいいました。

「いくらでもええだけたべろ」と和太郎さんは、牛の背中せなかをなでながらいいました。

「ようまでたべろ。よつてもええぞ、きようはおれが世話してやるで。きようこそ、一生に一ぺんのご恩がえしだ」

ついに牛は、おりをなめてしまい、土だけが残りしました。もうあたりはうす暗くなっていました。和太郎さんはまた牛をくびきにつけました。

青い夕かげが流れて、そこらの垣根かきねの木いちごの花だけが白くういている道を、腹いっぱいいたべた牛と、日ごろのご恩をかえしたつもりの和太郎さんが、ともに満足をおぼえながらのろのろといきました。

四

さて、和太郎さんも、きょうだけはじぶんがお酒を飲むのをよそうと決心していました。和太郎さんの意見では、牛が飲んだうえに、牛飼いまでが飲むのは、だらしないことであつたのです。しかし、それなら和太郎さんは、帰り道を一本松と茶屋の前にとつてはならなかつたのです。すこしまわり道だけれど、焼場やきばの方のさびしい道をいけばよかつたのです。

だが、和太郎さんは、なアに、きょうはだいじようぶだ、と思いました。「おれにだつてわきまえというものがあるさ」とひとりごとをいいました。そして一本松と茶屋の前を通りかかりました。

酒飲みの考えは、酒の近くへくると、よくかわるものであります。和太郎さんも、茶屋

の前までくると、じぶんの石のようにかたかった決心が、とうふのようにもろくくずれていくのをおぼえました。

じつは和太郎さんも、牛に酒のおりをなめさせているとき、じぶんも、のどから手の出るほど飲みたかったのを、おさえていたのです。その欲望が、茶屋の前できゆうに頭をもちあげてきました。

「ま、ちよつと一服するくらい、いいだろう」

と和太郎さんは、手綱たづなを松の太いみきにまきつけながら、いいました。牛はいつものようにおとなしくしていました。

そして和太郎さんは、茶店に、手をこすりながら、はいつていきました。

いつものとおりでした。もうちよつと、もうちよつとといっているうちに、時間はすぎていきました。徳利とっくりの数もふえていきました。

茶屋のおよしばあさんが、いろいろ和太郎さんの世話をやいて、松から手綱をといてくれたり、小田原おだわらちようちに火をとめてくれたのも、いつものとおりでした。

ただ、牛が地べたの上にねそべっていたことだけが、いつもとちがっていました。およしばあさんは、そうとは知らなかったので、もうすこしで牛につまずくところでした。和

太郎さんは、

「坊よ、起きろ」

と、いいました。

牛は、ふううツと太い長い鼻いきでこたえただけで、起きようとしませんでした。

「坊よ、腹でもいてえか。起きろ」

といつて、和太郎さんは、手綱でぐいツとひっぱりました。

牛はのろのろと、ものうげにからだを動かして、まずしりのほうを起こしました。前あしはふたつにおつて地についたままではらくいて、大きい鼻いきをたてつづけにするのでした。

「あら、いやだよ。この牛は。かじやのふいごのように、ふうふう、いうんだもの」と、およしばあさんはいいました。

「まるで、よいどれみたいだよ」

そのことばで、和太郎さんは、ようやく牛もたくさん飲んだことを思い出しました。そこでおかしくなつて、げらげらわらつていいました。

「それにちげえねえ」

やつとのもので牛が前あしを立てると、和太郎さんはいよいよ家にむかって出発しました。

いつも茶屋のおよしばあさんは、和太郎さんが出発してから、かなり長いあいだ、和太郎さんの車の輪がなわて道の上になて、からからという音を聞いたものでした。それが、その日は、じききこえなくなってしまうました。へんだとは思いましたが、ばあさんは、あまり気にもとめませんでした。なにしろ、牛飼いと牛と両方がよっぱらっているのですから、どこへいくのやら、なにをするのやら、わかったもんじやないからです。

五

和太郎さんの年とったおかあさんは、ぶいぶいと糸くり車をまわしては、かた目^{はしら}で柱時計^{どけい}を見あげ見あげ、夜おそくまで待つていました。

そのうちに、年とつてすすびた柱時計は、しばらくぜいぜいと、ぜんそく持ちのおじいさんのようにのどをならしていてから、長いあいだかかって、十一時を打ったのでありました。

いつも十一時が打つころには、外に車の音がきつとしてくるのでした。今夜はどうしたことだろう、とおかあさんは思いました。

十分すぎました。まだ車の音が聞こえてきません。おかあさんは心配になって、ひざから綿くずをはらい落としながら、門口に出てみました。

よい月夜で、ねしずまった家いへの屋根の瓦が、ぬれて光っていました。道はほのじろくうかびあがり、遠くまで見えていました。けれど遠くには和太郎さんの車のかげはありませんでした。

和太郎さんが夜、家に帰らなかったことといえば、いままでに、ほんのかぞえるほどしかありませんでした。おかあさんは、どんなときに和太郎さんがよそでとまったか、ちゃんとおぼえていました。和太郎さんが小学生だったころ、学校から伊勢参宮をしたときふた晩、それから和太郎さんが若い衆であつたころ、吉野山^{よしのやま}へ村の若い者たちといっしょにいったときが五晩、そしてやはり若い衆であつたころ、毎年村の祭の夜ひと晩ずつ山車^{だし}の夜番をしにいったものでした。そのほかに、和太郎さんが、家をあけてよそでとまってきたことは、一ぺんもなかったのです。そこでおかあさんは、だんだん心配になってきました。

十一時が二十分たちました。まだ和太郎さんは帰ってきません。おかあさんはどうとう決心しました。駐在所ちゆうざいしよのおまわりさんのところへ相談にいったのでした。

おまわりさんの芝田しばたさんは、なにか事件でも起こったかと、電燈の下であわてて黒いズボンをはき、サーベルを腰につるしながら下りてきました。

しかし芝田さんは、話を聞いて、すこしはりあいがぬけました。

「そりや、また和太さんが一ぱいやったんだろう」といいました。

「ンでも、こげなこと、一ペンもごぜえせんもの。あれにかぎって、いくらよっておつても、十一時にはちやんと帰ってきますだのイ」

と、和太郎さんのおかあさんはいいました。そして、十一時が二十分すぎてもまだ帰ってこないのは、きつと、とちゅうでおいはぎにでもつかまったにちがいないといいはるのでありました。

芝田しばたさんは、このおさまった御代みよに、おいはぎなどが、やたらにいるものではないことをきかせました。和太郎さんが、いつもじぶんは正体もなくよって、牛にひかれて帰ってくるのだから、今夜は、牛がなにかのぐあいで二、三十分おくれたのだろう、なにしろ牛

などというものは、あまり時間の正確な動物ではないから、ともいうのでした。

けれど和太郎さんのおかあさんは、じぶんの考えをいつまでもいいはるので、芝田さん
もとうとう根負け^{こんま}してしまつて、

「よし、それでは、そうさくすることにしよう」
といました。

いつも事件が起こったときには、村の青年団が駐在巡査の応援をすることになっていましたので、芝田さんは青年団の人びとにあつまってもらいました。まもなく青年団員は制服を着てゲートルをまいて、ぼうきれを持つてよつてきました。青年団員ばかりでなく、ほかのおとなや、腰のまがりかかったおじいさんまで、やつてきました。

じつは、このような、夜中に人が消えたというような事件は、この村には、もうなん十年も、なかったのです。このまえ、青年団が芝田さんの応援をしたのは、西山のふもとのわら小屋に草焼きの火がうつったときのこと、事件はたいそうかんたんでした。しかし、こんどの事件は、これはなかなかむずかしいのです。いったい、どうしてそうさくをはじめたらいいでしょう。

すると、富鉄^{とみてつ}さんという、大きい鼻のおじいさんが、いいことを思い出してくれまし

た。それはいまから四十年くらいまえ、村の一文商あきないやが、坂谷さかたにまで油菓子あきなの仕入れにいった帰り、ろっかん山のきつねにばかされて、まいごになったという事件でありました。そのとき、村の人びとは、かねやたいこを鳴らして、山や谷をさがして歩き、ついに、泉い谷みだにの泉の中で、ももひきを頭にかむつてががつふるえながら、「これはええ湯じゃ、ええかげんじゃ」といつている一文商いやを見つけ出すことができたのでありました。富鉄じいさんはこの話をよく知っていて、こまかく説明しましたが、それもそのはずで、きつねにばかされたのはじぶんのことだったのです。

富鉄さんの話を聞いてみれば、きつねにばかされるということも、ありそうに思えました。ろっかん山では、今でもよく、きつねのちらりと走りすぎるのが見られますし、村の中でだって、寒い冬の夜ふけには、むじなの声が聞けるのですから。また、たとい、きつねやむじなにばかされないにしても、よっている人間というものは、ばかされている人間とあまりちがわないというわけです。

そこでみんなは、鳴物なりものを持ってきました。かねはお寺でかりてきました。おそうしきせの出る時刻を、知らせてまわるときにたたく、あのかねです。たいこは、夜番が「火の用心」といってはドンとたたき、あのかねねげたような音のたいこです。もと吉野山参りの先

んだつ

達をなんべんもやった亀菊かめぎくさんは、ひさしぶりに鳴らしてやろうということで、宝蔵ほうぞう

倉ぐらからほら貝をとり出してきました。しかしひとふきふいてみて、おどろいたことにも

うそのほら貝は、しゅうしゅうという音をたてるばかりで、鳴りませんでした。「こりや、

ひびがはいったかや」と亀菊さんはいいましたが、息子の亀徳かめとくさんがふいたら、その

ほら貝はよい音で鳴ったのです。そこで亀菊かめぎくさんは、じぶんが年をとったことがよくわ

かりました。そして年をとることは、あほらしいことである、と思ったのでありました。

青年団のラツパ手林平りんぺいさんは、月の光でもピカピカ光るよいラツパを持ってきました。

こいつなら三里ぐらいは聞こえるだろう、と林平さんは心のなかで得意でした。

そして男たちは、手に手にちようちんを持って、山にはいつていきました。かねやたいこはたたかれ、ほら貝もふかれました。林平さんはラツパをどんなふしでふこうかまよいしました。

しかし、きつねにばかされた人間と牛をさがすのには、こういうふしはどれもぴつたりしないような気がしましたので、しまいには、ただ「プウツ、プウツ」とふしなしでふきました。すると、けなすことのすきな亀菊さんが「まるでゾウのおならみてえだ」といいましたので、林平さんは気をわるくしました。こんなことをいっても亀菊さんは、じ

つさいにゾウのおならを聞いたことなどありはしなかったのです。

みんなは、あちらこちらとさがしまわりましたが、同じ谷になんども下りたり、同じやぶになんどもはいったり、同じ池をなんどもめぐったりしました。これではまるで、じぶんたちがきつねにばかされているみたいだ、などと思いながら、みんなは十ぺんめにまた、同じ池をぐるりとまわりました。

もうだいぶんくたびれていて、ほら貝やラッパはもう鳴りませんでした。ときどきねぼけたような音でたいこが鳴るだけでした。さてこんなにしてさがしましたが、和太郎さんと牛は見つからなかったのです。それどころか、みんなのうちで、ふたりの人が、どこかへはぐれていつてしまったことがわかりました。いやはやです。これでは、いつまでさがしていてもむだなばかりか、かえって損というものです。

もう、池の面が、にぶく光っていました。そのとき、池のむこうのやぶで、年とつたうぐいすがしずかに鳴きましたので、みんなは、やれ朝になったかと思いました。そこで村に帰りました。

村の人たちは夜つびてねなかつたうえに、山の中を歩きまわったので、たいへんくたびれて村に帰ってきました。そして、ひとまず駐在所の前にきたのですが、もう立っているのがものういので、道ばたの草をしいて、みんなすわってしまいました。

すると、西の方の学校のうら道を、牛車が一台やってきました。もう仕事にいくのかと、みんなはぼんやりした目で見ていました。

牛車が駐在所の前を通るとき、のつていた男が、

「おい、おまえら、朝早いう。きようは道ぶしんでもするかえ」といいました。

見たことのある男だと思つて、みんながよく見ると、それが和太郎さんだったのです。

「なんだやい。おれたちア、おまえをさがして夜じゅう、山ん中を歩いておつただぞイ」と、かめぎく亀菊さんがいいました。

「ほうかい。そいつアはご苦労だったのオ」

といつて、和太郎さんは牛車から下りもせず、家の方についてしまいました。

「なんのことか」と、村びとたちはあいた口がふさがりませんでした。こんなことなら、

大さわぎして山の中をさがしまわるなど、しなくてもよかったのです。

これは、和太郎さんをみんなで、しかりつけてやらねばならないと、年より連中はいいました。それでないとくせになるから、というのでした。そこでみんなはねむい目をこすりながら、和太郎さんの家につめかけていきました。

和太郎さんは庭で、よぼよぼ牛をくびきからはずして、たらいに水をくんで飲ませていました。

「やい、和太」と村でりこうもんじろうぎもんの次郎左衛門さんがいいかけました。「おぬしは、村じゅうのもんにはえらい迷惑をかけたが、知つとるかや。おれたち、村のもんは、ゆうべひとねむりもせんで、山から谷から畑から野までかけずりまわって、おぬしをさがしたのだが、おぬしは、それに対してだまっておつてええだかや」

これでは次郎左衛門さんもそうさく隊にはいつていたようにきこえますが、ほんとうは、ついさつきまで家でねていたのです。

和太郎さんは、次郎左衛門さんのことばをきくと、びっくりしました。たいそう村の人たちにすまないと思いましたので、「そいつア、すまなかったのオ」と十三べんもいつて、そのたびに頭をかいいたり、背中せなかをかいいたりしました。そして、牛もじぶんもよってしまつ

たので、こんなことになってしまった、と説明しました。

村の人たちはいい人ばかりなので、じきに、腹がおさまりました。そこでこんどは、いろいろ和太郎さんにききはじめました。

「和太さん、それで、いままでどこをうろついていたダイ」

と、かめとく亀徳さんがききました。

和太郎さんは首をかしげて、

「どこだか、はつきりしねえだ。右へかたむいたり、左へかたむいたり、高いところののぼったり、ひくいとこに下りたりしたことをおぼえているだけのオ」
と、こたえました。

「それで、無燈で歩いとったのか」

と、おまわりさんの芝田しばたさんはききました。

「無燈じゃござえません。ここに小田原おだわらちようちんがつけてありますに、ごらんくだせエ」といって、和太郎さんは牛車の下へ頭をつっこみました。

ところが小田原ちようちは、上半分しか残っていませんでした。どうやら、水でぬれたため、紙がやぶれて、コイルのようにまいてあつた骨がだらりとのび、それがとちゆう

でなにかにひつかかって、ちぎれてしまったらしいのです。

「水にぬれたので、こんなになっちめえました」

と和太郎さんは、ちぎれて半分の小田原ちゃんをはずして見せました。

「そういえば、牛車も牛も、和太郎さんの着物も、ぐっしよりぬれているが、こりや夜つゆにしてはひどすぎるようだ」と、だれかがいいました。

「ひよつとすると、どこかの池の中でも通ってきたのじゃねえか」と、亀徳さんがいいました。

「まさか、そ、そんなことはありません」

と和太郎さんは、おかあさんがそばにいたので、あわててうちけしました。おかあさんに心配させたくなかったからです。

しかし、和太郎さんがいくらうちけしてもむだでありました。というのは、和太郎さんのふところから、大きなふなと、げんごろう虫と、かめの子が出てきたからです。こういうものは池にしかないものです。してみると和太郎さんの牛車は、どこかの池の中を通ってきたのです。

「この黄色い花はなんだろう」

とまた、だれかがいいました。見ると、よぼよぼ牛の前あしのつめのわれめに、黄色い花がひとふさ、はさまっておりました。

「れんぎょうの花ともちがうようだ。このへんじやいっこう見ねえ花だなア」
と、ひとりがいいました。

「そりや、えにしだの花だ。えにしだは、このへんにやめったにない。まアず、南の方へ四里ばかりいくと、ろっかん山のてっぺんに、このえにしだのむらがってさくところがあるげな。そして、ろっかん山のきつねは、月のいい晩なんかそのかげで、こきゅう胡弓をひくまねなんかしとるげなが」

と、植木職人の安さんがいいました。

和太郎さんはしかたがないので、

「めんもく面目ないけんが、どうやら、そこへもいったらしいて。ばかにりっぱな座敷があつてのう、それが、たたみもふすまも天じようも、みんな黄色かったてや。そういえば、耳のぴんと立った太夫がひとりござつて、こきゅう胡弓をじようずにひいてきかしてくれたてや。じや、あれが、きつねだつたのかイ」

「それにしても、どうして、あんな急な山のとっぺんへ、牛車がのぼったもんだらう」

と、村びとはふしぎがりました。

「なにしろ申しわけねえだな、牛もおれもよつておつたで」
と、和太郎さんはあやまるのでした。

さておしまいに、村びとたちにも、和太郎さんにもどうしてか、わけのわからぬことが
ひとつあったのです。

それは、牛車の上にひとつの小さい籠かごがのつていて、その中に、花たばと、まるまるふ
とつた男の赤ん坊がはいつていたことです。

どこでどうして、この籠かごをのせられたのか和太郎さんはいくら思い出してみようとして
も、むだ骨おりでありました。てんでおぼえがなかったのです。

「天からさずかったのじやあるめえか」と亀徳かめとくさんがいいました。「和太さんが、日ご
ろから、子どもがほしい、女房にようぼうはいらんが、といつていたのを天でおききとどけにな
つて、さずけてくれたのじやねえか」

和太郎さんは、亀徳さんがいいことをいつてくれたので、うれしそうな顔をしました。
しかし次郎左衛門じろうざもんさんは、

「そんなりくつにあわぬ話が、いまだきあるもんじゃねえ。子どもには両親がなけりやな

らん」

といいました。

また、芝田^{しばた}さんはひげをいじりながら、

「捨て子じやろう。一ぺんあとから駐在所へつれてこい。調査書を書いて本署にとどけるから」

といいました。

その後、和太郎さんは、赤ん坊の親たちがあらわれるのを待っていました。ついに、そんな人はあらわれませんでした。

そこで、その子には和助^{わすけ}という名をつけて、じぶんの子にしました。そして、一ぱいきげんのときにはいつでも、

「おらが和助は、天からさずかりものだ。おらと牛がよつぱらった晩^{ばん}に、天からさずけてくださったのだ」

といいました。すると、りこうもんの次郎左衛門さんは、

「そんなりくつにあわん話がいまどきあるもんか。子どもにや両親がなきやならん。よつて歩いてるうちに天から子どもをさずかるようなことなら、世の中に法律はいらないこ

とになる」

と、むずかしいりくつをいいました。

けれど、和太郎さんは負けていないで、こういうのでした。

「世の中は、りくつどおりにやいかねえよ。いろいろふしぎなことがあるもんさ」

さて、この天からさずかった子どもの和助君は、それからだんだん大きくなり、小学校では、わたしと同級で、和助君はいつも級長、わたしはいつもびりのほうでしたが、小学校がすむと、和助君は、和太郎さんのあとをついで、りっぱな牛飼いになりました。そして、いまでは和太郎さんは、だいぶんおじいさんになりましたが、まだ元気です。おかあさんとよぼよぼ牛は、一昨年なくなりました。

青空文庫情報

底本：「牛をつないだ椿の木」角川文庫、角川書店

1968（昭和43）年2月20日初版発行

1996（平成8）年6月20日34版発行

初出：「花のき村と盗人たち」少国民文芸選、帝国教育会出版部

1943（昭和18）年9月30日

入力：山田芳美

校正：林 幸雄

2001年4月9日公開

2014年6月27日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

和太郎さんと牛

新美南吉

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>